

「日本人へV 誰が国家を殺すのか」という新書がある。塩野七生さんの本である。「日本人へ」のシリーズ第5弾である。今まですべて読んできた。「国家と歴史篇」「危機からの脱出篇」「逆襲される文明」「リーダー篇」である。

塩野さん曰く、「日本人へ」という大袈裟な表題は編集部がつけたもので、内実は、遠く離れたローマから日本に住む親しい友人に向けて書き続けていった手紙、つまり私信なのだそうだ。塩野さんは、東京生まれだが、イタリアに遊学後、執筆活動を開始した。数年後、イタリアに在住するようになった。今も、ローマにお住まいである。

塩野七生さんを知ったのは、ローマにいたときだった。「ローマ人の物語」という本の存在を知り、読むようになった。全15巻を読破した。ハードカバーの分厚い本である。文庫本だと全43巻になる。

その作者が、塩野さんだった。ローマに住む日本人の会があり、のこのこと出かけていったことがある。たくさんの方が参加していた。塩野さんも参加していた。塩野さんだとすぐにわかった。「ローマ人の物語」の話をしたかった。すぐそばまで近づいたが、声をかけることはできなかった。その勇気がなかった。

塩野さんもよく書いていることだが、日本を離れていると、かえって日本のことがよくわかる、よく見えてくる。日本人として、日本のことを考えるようになる。私がそうだった。イタリアにいと、不思議なもので、日本の国旗である「日の丸」について知りたくなる。なぜ、あのデザインなのか。いつから使われるようになったのか。国歌「君が代」の歌詞の意味を考えるようになる。誰が詞を考えたのか。どこからかと思ったのか。

また、日本の政治について考えるようになる。イタリアの人は、よくサッカーと政治の話をしている。話は延々と続く。サッカーのイタリア代表が負けたりすると、テレビでは、1週間以上にわたり、その反省会をしている。みんなよくしゃべる。

イタリアを含めたヨーロッパと日本を比べてみると、日本人の特徴が浮かび上がってくる。ヨーロッパといっても、ラテン民族とゲルマン民族とでは違う。スラヴ民族も違う。それでも、ヨーロッパという一つのくくりにはできるようなところがある。アジアもそうであろう。

塩野さんの「日本人へ」は5冊目だが、相変わらず鋭く切り込み、歯切れが良い。納得させられることが多い。さすがは、日本に帰国する度に、名だたる政治家などと会食をしたりする方である。塩野さんに意見を求める方が多いということである。塩野さんは、遠く離れた異国の地から、日本へ警鐘を鳴らしているともいえる。それが「日本人へ」である。